

# 二〇二四年度 札幌大谷大学社会学部地域社会学科

## 一般選抜Ⅱ期

# 国語

### 注意事項

- 1 試験開始の指示があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 問題冊子は8ページあります。
- 3 試験中に印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて試験監督者に知らせてください。

□ 次の文章は戸谷洋志「SNSではどんな言葉が交わされているのか？」『SNSの哲学——リアルとオンラインのあいだ』創元社、二〇二三年）の一部である。本文を読んで、後の問いに答えなさい（設問の都合で原文の一部を省略改変した）。

私たちは多くの場合、言葉に対して次のようなイメージを抱いています。

まず、「私」のなかに、言葉になる前の考えや感覚がある。そしてその考えや感覚が、それと対応する言葉に置き換えられ、相手に対して発される、というイメージです。私のなかにある考えや感覚は、私にしかわからない、私だけのものであり、そもそも他者と共有できるものではありません。それに対して、「言葉」とは、他者と共有することができるものです。言葉と合体することによって、「私」のなかにある考えや感覚は、他者と共有できるものになるのです。

たとえば「私」が、たんすの角に足の小指をぶつけてしまい、「痛い！」と叫ぶとしましょう。このとき「痛い」という言葉は、「私」が感じた痛み  
の感覚と結びつき、その感覚が言語へと①ホンヤクされたものである、と考えることができます。

だから、なぜ「痛い」と言ったのか、と問われるならば、その答えは次のようなものになります。つまりそれは、「私」が「痛い」という言葉に結びつけられるところの、痛みを持っているからです。この痛みそのものを他者と共有することはできません。痛み【X】は、あくまでも【Y】になる前の、私的なものであるからです。それを他者と共有できるのは、その痛み【X】が「痛い」という【Y】に置き換えられるからにほかなりません。

「え、何をあたりまえのことを言うんだ」と思いましたか？ そう思われても不思議ではありません。実際、哲学の歴史においては長きにわたってこのような捉え方があたりまえだと考えられてきました。ところが、Aこの考え方の問題を指摘した人物がいます。イギリスを中心に活動し、「言葉」に関する現代の哲学に多大な影響を与えた哲学者、ルートウィッヒ・ウイトゲンシュタイン（1889—1951）です。

なぜ私たちは、私的な感覚である痛みを、「痛い」という言葉と対応させ、その言葉で表現することができるのか。この問いに対して、ウイトゲンシュタインは次のような革命的な答えを示しました。

彼によれば、「私」の考えや感覚と言葉の間には、そもそも対応関係などはありません。そうではなく、ただ、その場そのときのルールに拠ると「痛い」と言うことが適切だから、「私」は「痛い」と言うのです。

対応関係がそもそもない！ これはびっくり②仰天な発想です。

彼が考えていたのはこういうことです。私たちは、言葉を話すとき、その場のルールに基づいて、そのときそのときにもっとも適した言葉を選んで

話しています。この「ルール」が大切なのです。私たちがあるときにある言葉を発するのは、その言葉に対応する何か私たちのなかにあるからではなく、そのときにはそう言うのが最善だから、そういうふうには私たちのコミュニケーションのルールが決まっているからにはなりません。

だから、「なぜ私たちは、私的な感覚を、ある言葉に対応させて表現し、他者に伝えることができるのか？」という問いは、考えてもしかたのないことなのです。

『私』はなぜ、自分の感じているこの痛みと、『いたい』という3文字とを対応させることができているのか？なんて、そもそも示すことができせん。しかし、そんなことなどわからなくても、「私」は（多くの場合、自分でも意識せずに）その場のルールに従うことで、その言葉を選んで使い、他者とやりとりができています。その分には何の<sup>③</sup>シショウもないのです。

ウイトゲンシユタインは、このように一定のルールに基づいて交わされる言葉のあり方を、「言語ゲーム」と呼びました。これは、私たちの言葉に対するイメージを大きく変える発想です。しかし、同時に、日常的な言葉のやりとりがどのように成り立っているのかをうまく説明してくれる考え方もあります。

もう一度、たんすの角に足の小指をぶつけたときのことを考えてみましょう。そのときあなたは「痛い！」と言うわけですが、しかし、どこかに足の小指をぶつけたとき、どんな状況でも必ず「痛い！」と言うわけではないでしょう。Bたとえばあなたがものすごく偉い人と話していて、礼儀正しくしていなければならぬとき、ふとした弾みでたんすの角に足の小指をぶつけても、きつと「痛い！」と叫んだりはしないはず。何か大きな災害が起こり、あわてて家を出て<sup>④</sup>ヒナンするときに、たんすの角に足の小指をぶつけたとしても、「痛い！」とは言わず、ともかく先を急いで走るかもしれません。あるいは、廊下を歩いていて、角を曲がったところに置いてあったたんすの角に足の小指をぶつけ、転びそうになったとしたら、むしろ「誰だよ！ こんなところにたんすなんて置いたのは！」などと言うかもしれません。

ある状況では「痛い」と言うのに、別の状況では「痛い」と言わない。なぜでしょうか。もしも「言葉は私的な感覚と結びついて発されるものだ」と捉えるなら、その理由はうまく説明できません。しかし言語ゲームの理論に従えば、簡単に説明できます。つまり私たちは、言葉を私的な感覚と対応させて話しているのではなく、自分の置かれている状況において、その場での最善のアクションとなるような言葉を話しているにすぎないから、ということなのです。

ただし、ここで注意しておくべきことがあります。それは、言語ゲームにおいて私たちが従うルールは決して一つではない、ということなのです。いや、そもそもそうしたルールには、公式／非公式といった区別もなければ、ルールブックも存在しません。確かにそこにはルールがありますが、そのルールには<sup>A</sup>無数のバリエーションが存在し、そして刻々と変化しつづけていくのです。

言葉をこのように捉えるなら、Twitterで日々繰り返り広げられているコミュニケーションは、実は<sup>C</sup>極めて複雑な言語ゲームなのだと思えることができ

るでしょう。

Twitterの「つぶやき」は、「ひとりごと」という形で語られます。しかも、140字という字数制限があるため、そこに記される情報はかなりシンプルであり、いったいどのような意図で、どのような文脈のなかで書かれたものなのか、背景が見えにくくなっています。

だからこそ、「つぶやき」を目にした人は、それを自分に都合のよいルールに基づいて解釈し、反応することができます。たとえば言うなら、何のスポーツをしているのかわからない相手から飛んできたボールに、自分がプレーしているスポーツの流儀でリアクションするような状況です。もしもあなたが野球をしているならバットで打ち返すでしょうし、バレーボールをしているなら強烈なレシーブを決めるでしょう。

しかし、そうしたリアクションは、当然のことながら、相手の立場からすれば不適切な対応になりえます。相手はサッカーをしているつもりなのに、そのボールをあなたがバットで打ち返してくるかもしれないからです。Twitter上で起こるトラブルの多くは、そうした言語ゲームの誤解に基づくものなのではないでしょうか。

あるいは、フォロワーが100人の人の投稿が、フォロワーが10万人の人にリツイートされたとしましょう。すると、その投稿の持つ意味合いはずいぶん変わってしまいます。それもまたスポーツにたとえて考えるなら、友達と一緒に公園でサッカーをプレーしていたはずなのに、何かの魔法によって突然、満員のスタジアムにワープさせられたような状況です。友達の前だからこそできるふざけたプレーも、スタジアムのまんなかでやれば「不適切だ」とされてブーイングを浴びるかもしれません。これも、言語ゲームのルールが急変することによって生じるトラブルである、と考えることができるでしょう。

ワイトゲンシュタインは、哲学の役割を「ハエとり壺のハエに出口を示してやること」だと説明しました。ある問題に頭を悩ませるとき、私たちは多くの場合、問題そのものが難しいから答えを出せないのだと考えてしまいます。しかし彼の考えでは、その本当の理由は、むしろ**その問題を考えるために適した言葉を使えていない**という点にあるのです。まちがった言葉で考えているからこそ、私たちは「ハエとり壺」のなかに迷いこんだハエのように、行き先を見失って**イ堂々めぐり**をしてしまいます。そこから脱出するためには、問題そのものの解決を急ぐのではなく、より適した言葉で思考することが必要です。腕を組んで「ムムツ」と考えこむ前に、まず言葉を柔軟に使いこなせるようにならなければなりません。

おそらく、私たちがSNSを使用するときにも、同様の注意を払う必要があるでしょう。ある投稿について、「これが何を言っているのかまったく明白で、よく理解できる」と思ったとしても、投稿した人は、その言葉に「私」には想像もできないような意味を担わせているかもしれません。同じようにボールを蹴っていても、「私」と他の人が則っているルールはまったくちがっているかもしれません。SNSとは、そうした可能性を内部に

抱<sup>か</sup>えている、ベリーハードな言語ゲームが展開されている場にほかならないのです。

問一 傍線部①～⑤の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直して記しなさい。

問二 傍線部ア「無数」、傍線部イ「堂々めぐり」の意味を記しなさい。

問三 【X】と【Y】に最適な2字の言葉を本文中から抜き出して記しなさい。

問四 傍線部A「この考え方」の説明として最適なものを選び、記号で答えなさい。

ア 私たちはその場のルールに従って、言葉を発しているという考え方。

イ 言葉と感覚の対応関係を唯一のルールとして、最善の選択をするという考え方。

ウ ルールの異なる言語ゲームにおいて、トラブルを避けるのは容易ではないという考え方。

エ 私的な感覚は、それと対応する言葉を通じてはじめて他者と共有可能なものとなるという考え方。

オ まず私的な感覚があり、それを表現するためには言葉では不十分であるという考え方。

問五 傍線部B「たとえばあなたがものすごく偉い人と話していて、礼儀正しくしていなければならないとき、ふとした弾みでたんすの角に足の小指をぶつけても、きつと「痛い！」と叫んだりはしないはずですよ」とあるが、それはなぜだと考えられるか。本文の内容を踏まえて簡潔に記しなさい。

問六 傍線部C「極めて複雑な言語ゲーム」とあるが、筆者が「Twitter」におけるコミュニケーションをそのようなものとしてとらえているのはなぜか。100字以内で記しなさい。

Ⅱ 次の文章は吉川浩満『理不尽な進化 増補新版 遺伝子と運のあいだ』（ちくま文庫、二〇二二年）の一部である。本文を読んで、後の問いに答えなさい（設問の都合で原文の一部を省略改変した）。

私たちは進化論が大好きである。

この世界にはたくさん種類の生き物がいる。現代の科学においては、生き物たちはひとつまたは少数の共通の原始的な祖先から、世代交代とともに姿形を変え、枝分かれをしながら現在にいたったと考えられている。これは現代人にとっては常識だが、大昔から常識だったわけではない。ダーウインの進化論によって初めてわかったことだ。そのようにして進化論は、さまざまな生物の由来と変化のメカニズムを明らかにしてくれる。

進化論は、まずなによりも生物の世界を説明する科学理論である。だが、私たちはそうした枠をはるかに飛び越えて、あらゆる物事を進化論の言葉で語る。実際、身のまわりは進化論の言葉であふれている。「進化」という言葉を見たり聞いたりしない日はないし、「適応」「遺伝子」「DNA」といった言葉もおなじみのものだ。

言葉があふれているだけではない。とくに熱心に勉強したわけではなくとも、私たちは進化論の考え方をなんとなく理解しているように感じている。たとえば、「ダメなものは①淘汰されるのさ」とか、あるいは「刻々と変化するビジネス環境に適応できるか」とか、「激動に揺れる東アジアにおける日本の生存戦略とは」とか、「企業のDNA」や「進化する天才」といった言い方を、私たちはa. たちどころに理解できる。本の業界では「ネット時代における出版社の適応戦略はなにか」といった話題が出たりする。

というわけで、いまやあらゆるものが進化する。携帯電話はスマートフォンに進化し、寄り合いはSNSに進化し、アルコール飲料の進化はついに「第三のビール」を生み出すにいたった。ビジネスも、製品やサービスも、国家や社会制度も、男子も女子も、b. 猫も杓子も進化する。同時にあらゆるものが、適応に失敗し、子孫を残すことができず、「退化」したり絶滅したりする危険にさらされてもいる。

お金をめぐる経済的なトピックだろうと、地位をめぐる政治的なトピックだろうと、恋愛のような個人的なトピックだろうと、進化論ならば「存続か死滅か」という明快かつ②ゲンカク、そして究極的な評価軸によって、まとめて引き受けてくれる。その意味で進化論は、生物の世界を説明するための科学理論というだけでなく、この世界そのものを理解するための基本的な物の見方、思考の枠組み、世界像、世界観と呼べるようなものになっているといえるだろう。

実際、進化論の言葉でもってなにかを語ると、なんとなく説得力が増すように感じるのではないだろうか。「勝ち組／負け組」「ガラパゴス化」「強者／弱者」「リア充」「婚活」「非モテ」といった流行語も、環境への適応に成功して生き延びる者／失敗して死に絶える者、という進化論的な文脈のもとに置けば、ずいぶんとわかりやすくなるはずだ。

このような進化論にかんする私たちの日常的なイメージが正しいものであるかどうかは、いまは問わない。そもそも進化論とは何ぞやという話についても、とりあえずは深く考えないでおこう。実際には、メディアや日常会話で交わされる進化論風の語りが正しいものなのかどうか、進化論を社会や個人のありかたに適用する際のやり方が妥当なものなのかどうかは、はなはだ怪しい。

それでもたしかにいえることは、世間に流布している進化論のイメージにいかなる不備があるとしても、進化論的な物の見方やその言葉が喚起するイメージが、物事を「死滅か存続か」という究極的な尺度で測るリアルなものとして私たちに受容されているということだ。日本人は進化論風の話が好きなので、明治期に輸入されて以来ずっと、この世界の「実相」や「真相」、つまり「きれいごと」ではない本当のありかたを言い当てるものとして<sup>d</sup>重宝されてきた。

究極的ただけではない。それは包、括、的、でもある。つまり進化論はなんにでも適用でき、すべてを含みこむことができる。もともとスケールが大きいように思える物理学的宇宙論さえ、進化論の包括性にはかなわない。進化論にかかれば、宇宙も宇宙論も「進化」する事物の一員という、数あるレパートリーのひとつにすぎなくなる。これ以上に包括的な視点があるだろうか。私たちにとって進化論は、万物が。生々ル<sup>e</sup>テン<sup>e</sup>する世界において、その<sup>d</sup>栄枯セイスイのメカニズムを包括的に説明してくれる物の見方の。ヒットウ候補、というかほとんど唯一の候補者である。

この究極性と包括性という点において、<sup>A</sup>進化論は史上最強の科学思想だ。だからこそ私たちは進化論のアイデアに魅力を感じ、その言葉で語りつづけるのである。

(中略)

だが、ふとこんな疑問が脳裏を「よぎることがあるのだ。「みんな何処へ行った?」(©中島みゆき)と。

後に詳しく見るとおり、これまでに地球上に出現した生物種のうち、じつに九九・九パーセントがすでに絶滅している。子孫を残すことができず、系統が途絶えてしまったのだ。いま私たちが目にするのできる生き物の種類は莫大な数にのぼるが、それはこれまでに出現した生物種のうち、わずか〇・一パーセントにすぎない。では、残りの九九・九パーセントの生き物たちはどこへ行ってしまったのだろうか? 彼らはどうしていなくなってしまったのだろうか? こうした疑問がわきおこってくるのである。(中略)

私たちの日常生活は進化論の比喩的な用法にあふれている。なかでも典型なのはビジネスや処世術、人生訓で用いられる進化論(「ビジネス進化論」)だろう。これらの語り手たちは、進化論が教える生物の世界をモデルとして引きあいに出しながら、私たちに絶え間なく「進化」しつづけるよう命じる。そして厳しい競争を勝ち抜いていこうと<sup>g</sup>コブ<sup>g</sup>する。テレビ、新聞、雑誌、ネット、看板、中吊り広告、社員研修等々で、こうしたものを見ない日はない。

彼らはこんな風に語る。いわく、この社会は生き残りをかけたサヴァイヴァルゲームの舞台だ。生物の世界と同じように、そこでは優れた者だけが

生き残り、劣った者は消え去る運命にある。ライヴアルとの競争に敗れたら、滅び去るほかない。君たちは恐竜や三葉虫のように滅びていきたいのか。そうなりたくなければ、変化する環境に適応していかなければならない。そして<sup>6</sup>フダンに進化をつづけていかなければならない。個人も企業も国家も、ビジネスマンも政治家もアスリートも、みんなこのサヴァイヴアルゲームのプレーヤーなのだ。だから、たえず競争し、適応し、進化をつづけよ、云々。

勇ましい話である。たしかに、努力や心が次第で勝ったり負けたりするような世界ならば、こうした訓話もひよっとしたら役に立つかもしれない。しかし、モデルとなる生物の世界は、九九・九パーセントが絶滅する世界である。この事実を前にして、例外中の例外である〇・一パーセントの稀有な成功例ばかりをお手本にするのでは、いかにも危なっかしいのではないだろうか。千にひとつの僥倖（きやうじやう）に恵まれた者を除いて全員が滅びゆく運命にある世界で、語り手たちはなぜか自分たちがわずか〇・一パーセントを占めるにすぎない勝ち組に属するのだと思いついてるようなのである。<sup>g</sup>思わず、本気なのか？ と尋ねたくなる。（中略）

もし本気で進化論の知見をビジネスや処世術に活かしたいと思うのなら、むしろ絶滅を基準として作戦を練りなおしてみるべきではないだろうか。生き残る確率より滅び去る確率のほうが九九九倍は高いのだから、滅び去った者たちに思いを馳せ、<sup>B</sup>滅び去る立場でものを考えてみることは、十分に理にかなったことだろう。



問一 傍線部①～⑥の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直して記しなさい。

問二 傍線部 a 「たちどころに」、傍線部 b 「猫も杓子も」、傍線部 f 「よぎる」の意味を記しなさい。

問三 傍線部 c 「生タルテン」、d 「栄枯セイスイ」、e 「ヒットウ候補」について、空欄を埋めて四字熟語を完成させなさい。

問四 傍線部 g 「思わず」を使って短文を作りなさい。

問五 傍線部 A 「進化論は史上最強の科学思想だ」とあるが、筆者はその理由として二点をあげている。その二つについて、本文に沿ってそれぞれ50字程度で説明しなさい。

問六 傍線部 B 「滅び去る立場でものを考えてみることは、十分に理にかなったことだろう」とあるが、この見解に対するあなたの考えを自由に記しなさい。